

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2005 年 7 月～9 月)

2005 年 10 月 6 日
樋口和憲

日が急に短くなり、秋（そして冬）が近づいてきたことを実感します。ドイツの秋といえばオクトーバーフェスト！という人も多いかもしれません。オクトーバーフェスト(10月祭り)という名前がついていますが、10月の第一日曜日が最終日。今年は9月17日から10月3日までの限定です。今年170回目となるこのミュンヘン・ビール祭りは、収穫感謝祭を起源にするのかと思っただけでしたが、元々1810年10月12日に行われたバイエルン王家の結婚式が始まりだそうです。ドイツでも収穫祭や豊作祭りのように秋祭りが行われる地方はあるようですが、あまり一般的ではないとも聞きます。むしろ、ゲルマン人が季節を二分していたように、ヨーロッパではケルト暦で冬（新年）を迎える11月1日（万霊節）が一年の締めくくりとして、収穫完了を祖霊に感謝し、新しい年の豊穡を祈る日であったようです。

1. はじめに - 人文・社会科学とドイツ

今年のノーベル賞受賞者も続々と決定しているが、人文・社会科学でそれに匹敵する国際的に著名な賞はあるのだろうか。あるいは人文・社会科学では価値観が異なりすぎて受賞者を決めることができないということなのかもしれない。ノーベル経済学賞（ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞）はノーベルが遺贈したものではなく、正確にはノーベル賞ではない。ドイツ人研究者では1994年にラインハルト・ゼルテン教授（ボン大学名誉教授）がゲーム理論の発展でノーベル経済学賞を受賞している。ノーベル経済学賞は1995年からその対象を社会科学と再定義してはいるが、実際には経済学者以外の受賞を聞いたことがないように思う。

今年は特に「物理の国際年」、アインシュタインの奇跡の年から100年・・・何かと物理学、自然科学の研究だけが注目されている。学術においても、経済優先の競争社会では経済発展につながる「役に立つもの、即戦力」が優先される傾向にある。しかし、私がアインシュタインを科学界のトリックスター（価値を逆転させる異界の原理を持ち込むヒーロー：文化に対する創造者、破壊者、再創造者）と呼んだように、その研究が当時すぐ実用の役に立つなどとは誰も考えもつかなかった。

逆に言えば、今ほど、すぐ経済発展の役には立たない人文・社会科学がその真の力を問われている時代はないとも言える。それならば、人文・社会科学界のトリックスターはどうか？

さしずめ、フランスではクロード・レヴィ＝ストロース、ミシェル・フーコーあたりだろうか？ドイツではトリックスターになるには人生に対し真面目すぎるのだろう、なかなか見当たらない。古くはカント、ヘーゲル、そしてゲーテもこの世界に対し人生真つ向勝負という感がある。昨年京都賞を受賞したユルゲン・ハーバーマス教授（フランクフルト大学名誉教授）も素晴らしいと思うが、やはり時代と社会に対峙した真面目な思索家だ。しかし、やはりドイツの人文・社会科学者で忘れてならないのは、マックス・ウェーバーその人だろう。彼は1904年に「プロテスタ

ンティズムの倫理と資本主義の精神」を執筆し始め、1905年に完成・出版している。その意味で今年「資本主義の精神」100周年でもある。

ウェーバーは心身崩壊を起すほど真摯に時代と人生に取り組んだ。彼は1898年に重い神経疾患で精神病院に療養し、大学教授としての「職業人」の生活軌道から外れている。1901-1902年のイタリア療養旅行でかなり回復し、1904年アメリカ訪問。これが「資本主義の精神」執筆の源泉になる。彼はその時代の社会、そして「職業人」がどこから生まれ、現在どこにいて、これからどこに向おうとするのかを徹底的に考察した。禁欲的なプロテスタンティズムの倫理がなぜ欲望の権化・資本主義の精神をなすのか、一見逆説的な倫理と精神をつなぐ彼の考察は、まさに100年先を見通したものである。引用してみよう。

「今日営利活動の最も自由な地域である米国では営利活動は使命感・価値観を喪失してしまっ、単なる競争の熱情に結びつく傾向にあり、その結果一種のスポーツになっていることさえある。・・・(中略) こうした文化発展の「最後の人びと」とっては、次の言葉が真理となるであろう。「精神のない専門家、心のない享楽人。これらの無に等しいものは、かつて達せられたことのない人間性の段階まで登りつめた、と自惚れるのだ」と。」

ウェーバーは営利活動が使命感や価値観を喪失してスポーツ化すること、精神のない専門家、心のない享楽人がわが世を謳歌する現代社会の末路をすでに100年前に見抜いていたのである。

ウェーバーが見通した資本主義の末路、一部の勝者が大多数の敗者と弱者を生み、大多数の物言えぬ敗者と弱者が「無に等しいものたち」を支える「自由競争」という原理。

持てる者の「保持」と持たざる者・奪われた者の「不満」の二極対立が「自由競争」の名のもとに世界中で強まっている。「自由競争」という名のもとに多様な能力が切り捨てられていく。それがおかしいと誰も言えない社会はやはりどこかがおかしい。それを不幸なことに実力行使してしまっているのがテロであり、2つの異なる社会体制を経験した国民が投票でそれはおかしいと主張したのがドイツの選挙結果であり、私腹を肥やすことだけではないように見える首相にある種の「持てる者」退治を期待したのが日本の選挙結果であるように思える。競争する以前にすでに社会的敗者で弱者である日本のフリーター、ニート、自殺者の増大も根本的には同じ根なのだろう。

現代社会は多くの問題を抱えている。そして文化の生み出した問題に対し、技術やシステムを変えることで応えようとして、それが次々と別の問題を生み出している。文化の生んだ問題は文化(価値観)を転換することでしか真の解決の道はない。環境、企業、政治、行政、教育、家庭などいずれの問題も根には何を大切にし何に価値を置くべきかというそれぞれの組織文化の問いがある。だからこそ人文・社会科学は文化そのものを問い、どう生きてきたのか、そしてどう生きるかという価値観を問わねばならないのである。それは競争とは別次元の一人一人の生き方を問う価値と認識の問題である。カール・ユング(※)は「学問をするということは正しさを競う争いではなく、認識を豊かに深めるための作業である」と言った。学問に関わる者はその言葉を肝に銘じたい。

もしもマックス・ウェーバーが生きていたら、この現代社会に対し何を発言するだろう。“役に立たない”人文・社会学者がトリックスターとなって新たな文化観を提示することをウェーバーの「資本主義の精神」100年にあたり私は期待したいと思う。

(※注：カール・ユングはスイス出身だが、ドイツとスイスにまたがるボーデン湖畔のローマンズホルンに生まれている。彼の祖父はドイツのマインツ出身。ハイデルブルグで医学を学び、その後、アレクサンダー・フォン・フンボルトが彼の祖父をバーゼル大学に推薦したため、スイス国籍となる。その意味でも、その学問から見てもカール・ユングはドイツ的な学者である。)

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎エクセレンス・イニシアティブ：25大学がエリート大学めざす

dpa, Nr. 34/2005, 22. August, 2005

参考：<http://www.bmbf.de/press/1566.php> (連邦研究教育省第一次計画分関連予算)
<http://www.bmbf.de/en/1321.php> (連邦研究教育省ホームページ)

○前号でご報告したエクセレンス・イニシアティブが具体的に動き出した。昨年末の連邦主義改革をめぐる決裂以来頓挫したと見られていた大型助成プログラムは、選挙の可能性のためだったのか、必要に迫られたためか（誰の意見を聞いてみても）定かではないが、予想外に 6 月 23 日ベルリンでシュレーダー首相と各州首相が合意し協定に調印した。

9 月 4 日、連邦政府は第一次計画分予算として 7 億 1400 万ユーロ（約 976 億円）の拠出を承認した。DFG が 7 億 1100 万ユーロ（うち運営管理費 1230 万ユーロ）、独学術評議会（Wissenschaftsrat）が運営管理費 300 万ユーロを受領し、DFG が配分機関となる。

2006 年から 2011 年まで、このエクセレンス・イニシアティブによって、(1)大学・研究機関、各地域での企業とのネットワークを築く 30 の先端研究施設（エクセレンス・クラスター）の設立 (2) 若手研究者の振興に役立つ 40 の新たな大学院（グラデュエート・コレグ）(3)競争によって選ばれる 10 の大学にはドイツの研究の“灯台”として国際的な名声をあげるため、年間 1350 万ユーロの援助金が拠出される。

合計総額 19 億ユーロ（約 2600 億円）の資金は、連邦〔75%：14 億 2500 万ユーロ〕と（選考された大学所属の）各州〔25%：4 億 7500 万ユーロ〕が持つことになっている。資金源は他の予算財源を縮小して本件予算に回すものとみられる。

計画を整理してみると、以下のとおりとなる。

第一次計画（今回）	連邦分：7 億 1400 万ユーロ、各州分：2 億 3800 万ユーロ
	2005 年 8 月募集—2005 年秋審査—2006 年秋決定 ～2010 年まで支援
第二次計画（見込み）	連邦分：7 億 1100 万ユーロ、各州分：2 億 3700 万ユーロ
	2006 年 5 月募集—2006 年秋審査—2007 年秋決定 ～2011 年まで支援

先端研究とエリート大学振興のための 19 億ユーロにおよぶエクセレンス・イニシアティブ・プログラムはドイツの大学からの大きな反響を巻き起こした。ほぼ全ての大学代表者が 8 月 17 日に Bonn で催された独学術評議会(Wissenschaftsrat)とドイツ研究協会(DFG)による説明会に出席した、と独学術評議会は dpa に語った。

8 月 1 日までの締切に 193 の大学がエクセレンス・クラスターに、190 の大学はグラデュエート・コレグに応募したという。25 の大学がエリート大学振興プログラムの参加を目指している。（注：BMBF の 9 月 4 日公表では合計 400 件を超えるとなっている。）

今後 9 月 30 日までに各大学はエクセレンス・クラスターとグラデュエート・コレグに関するそれぞれの意向を具体的にまとめ、申請書を DFG に提出しなければならない。エリート大学のための応募期限は 10 月 14 日だ。独学術評議会と DFG によって選ばれたレフェリーが申請書を評価する。

Baden-Wuerttemberg 州の諸大学 エリート振興をめぐって競争

テーマの幅広い多様さで Baden-Wuerttemberg 州の諸大学はエリート大学振興プログラムに応募する—いくつかの大学は同時に複数のクラスターやグラデュエート・コレグを提案する。“私たちは説得力を持った自然科学と人文科学の組み合わせで応募をする”と、Tuebingen 大学学長 Eberhard Schaich 氏は dpa アンケートに答えた。彼の大学は合計 1 ダースものエクセレンス・クラスターとグラデュエート・コレグのための応募書を提出している。あるクラスターは倫理問題の“技術の発展に対する人間の完璧化と完全指向化”について、また他のクラスターは地球科学・文化科学の研究である“地球というシステム—文化と自然の空間”について取り組む。

Baden-Wuerttemberg 州の全ての大学が早くも今から一般公開してこの競争を繰り広げることを望んでいる訳ではない：Mannheim 大学, Karlsruhe 大学, Stuttgart 大学は提出したテーマについての情報を公表しなかった。Konstanz 大学は応募コンセプトがまだ完成していないと報告した。Heidelberg 大学は 4 つのテーマでエクセレンス・クラスターの競争に参加する：宇宙の誕生、細胞研究、文化科学の新しいメディアへの関係、そして総合的な科学的計算。グラデュエート・コレグは“地球という宇宙船—人間の環境の科学”と“世界領域としてのヨーロッパ”のテーマでの設立を目指している。

Hohenheim 大学は 3 つのグラデュエート・コレグと 1 つのエクセレンス・クラスターの 4 つの応募に共同で一つのテーマを選んだ：“人間のための生命科学と持続性研究”。生物学と医学の分子細胞研究、ヨーロッパ刑法、そしてヨーロッパ文化の比較の研究分野では Freiburg 大学がエクセレンス・プログラムのために 11 のプロジェクトを用意している。Ulm 大学は分子医学のグラデュエート・コレグの設立を目指し、さらに 2 つのエクセレンス・クラスターも希望している。

州科学大臣 Peter Frankenberg 氏 (CDU) は大学研究のためのエクセレンス・イニシアティブを“前進”へのチャンスとして見る。この振興運動によってドイツの大学の国際競争力を向上することが出来ると考えている。大学全ての振興ではなく、一つ一つの研究プロジェクトの振興なのだ。Frankenberg 氏はインフラ経費を含む全額負担へのスタートも賞賛した。これまでは部屋や器具といったインフラ設備費用は振興の対象ではなかったためだ。

◎Mainz 先端研究を振興—連邦プログラム：大学の協定

dpa, Nr. 28/2005, 11. Juli, 2005

○前号では、大学間連携、協力をめざすヘッセン州の動向をご紹介したが、エクセレンス・イニシアティブが動き出し、ドイツでは各大学が大学単位で孤立して競争するのではなく、州単位の大学間協力でエリート大学競争に勝ち残ろうとする動きが見られ、州間競争の様相を呈してきた。エクセレンス・イニシアティブに先んじて、連邦独自の類似プログラムをスタートさせた

Rheinland-Pfalz 州、また NRW 州と Baden-Wuerttemberg 州の大学間協力の動向も併せてご紹介する。ドイツの州 (Land) の独立性、自負の自立性の強さはこのようなところでも発揮されているようだ。

Rheinland-Pfalz 州は数百万ユーロ単位のプログラムで先端研究を振興し、連邦-諸州-プログラムでの地位を確保したい。州政府首相 Kurt Beck 氏 (SPD) が 7 月 5 日に語ったところによれば、2005 年/2006 年度の 4 つのエクセレンス・クラスターと 4 つのグラデュエート・コレグ (大学院課程) のために、合計 1050 万ユーロほどが用意されているそうだ。2006 年度以降は年間 900 万ユーロが予定されている。“大きなイノベーション・ステップ”を期待する、と Beck 氏は言った。

新しいエクセレンス・クラスターは連邦-諸州-プログラムで先端研究として考慮されるための最高の条件を満たしている、と州科学大臣 Juergen Zoellner 氏 (SPD)。このような大学と外部研究施設の協力同盟の振興やエクセレンス・グラデュエート・センターの設立は、連邦と諸州のエクセレンス・イニシアティブの 3 本柱の内の 2 本に合致する。“私たちのプログラムで同じ競争条件を求めたことによって、連邦-諸州-プログラムからの援助金をめぐる競争で Rheinland-Pfalz 州の諸大学に大きな利点をもたらした”と Zoellner 氏。このプログラムはつい最近 1 年半の論争の末に決定された。

Rheinland-Pfalz 州の先端研究の振興は “Wissen schafft Zukunft (知識は未来を作る)” という、2009 年までの間に大学や専門大学に合計 1 億 2500 万ユーロが追加で用意されるプログラムの礎石の一つである。もう一つの礎石は諸大学の基礎設備の改善だ。4 つのクラスターそれぞれに年間平均 180 万から 200 万ユーロが用意される。Zoeller 氏によると、若手研究者達が様々なプロジェクトで一緒に働く 4 つのグラデュエート・コレグは 35 万ユーロまでの資金で振興される。

教育研究プロジェクトにもエリート振興

援助金は医学、地球科学、数学・情報学、人文科学、物理・化学と社会学のプロジェクトに流れる。Koblenz-Landau 大学のグラデュエート・プロジェクト “Teaching processes” はその一つだ。心理学、教育学、教授学の協力によって学校での専門教授法の改善を目指す。Zoellner 氏曰く、実践に伴った授業・教育研究が教員の育成に統合されることになる。

Mainz 大学は 4 つのうちの 2 つのエクセレンス・クラスターに参加：1 つは人間の免疫について、もう一つは地殻の成長と気候についての研究がなされる。さらに Kaiserslautern 工科大学では自己学習するソフトウェアシステムの開発のプロジェクトと Trier 大学では社会的、経済的推移の研究が振興される。

ハイ・クオリティーな国際的エキスパート・グループが 21 件の提出された応募の中から 8 つのプロジェクトを選抜した。委員会には DFG (ドイツ研究協会) 会長 Ernst-Ludwig Winnacker 氏、BMW 監査役会会長 Joachim Milberg 氏、歴史家 Ulrich Herbert 氏 (Freiburg 大学) 等が入っている。このプログラムは 2005 年の一月にやっとスタートしたばかりだ。諸大学にはたったの 2 ヶ月半しかそれぞれの提案を提出する時間が無かった、と科学省代弁者の Michael Au 氏は語った。

プログラムのアイデアと実行を請求する SPD 連立パートナーである FDP はこの新しい振興を歓迎しながらも、更なる努力へと呼びかけた。“私たちは次の議会の任期で現在言われているトップ能力への援助の延長をはるかに超えた新しい研究特別プログラムを必要とする。” と、FDP 派閥のリーダー Werner Kuhn 氏は言った。

諸州の大学 力を束ねたい

NRW 州と Baden-Wuerttemberg 州での Dpa-アンケートによると連邦-諸州-プログラムに対する諸大学の関心はとても強い。多くの研究施設がその三本柱競争による 40 のグラデュエート・コレグ、30 のエクセレンス・クラスター、そして 10 の “灯台” 大学の設立で成功を収められるよう、力を合わせようとしている。諸大学は 8 月 1 日までに競争への申込書を担当機関：ドイツ研究協会 (DFG) に提出しなければならない。

NRW 州ではすでに多数の大きな大学が他の大学や研究施設との協定への意思を示した。Bonn 大学は 3 つのプログラム・カテゴリーすべてに援助金の申し込みをし、その際近くの諸大学と協力をしたい、と Matthias Winiger 学長は dpa に語った。“私達はすでに存在する ABC-地方 (Aachen-Bonn-Cologne/Koeln) での良いご近所関係に基づかせて (協力して) います。”

Bochum Ruhr 大学は Dortmund 大学と現地の Max-Planck-財団と協力する予定。界面塗装の分野では Duesseldorf の Heinrich-Heine 大学との協定を目標としている。Ruhr 大学は生体医用工学と情報技術に重点を置く。この地域一大きな大学も 3 つのすべてのカテゴリーに申し込みをする、と Gerhard Wagner 学長は言った。

Dortmund 大学は化学生物学と生産工学での応募を予告した。青少年-、学校-、教育研究の分野では Bielefeld 大学と共同した申し込みになるかもしれない。

Tuebingen 大学の Eberhard Schaich 学長によると Baden-Wuerttemberg 州の諸大学はこの振興プログラムでの特に高い参加率を期待しているようだ。“私達はかなり多くの申し込みを行っています。クオリティーとエクセレンスが（選別に）決定的であって、地域の割合等といった専門外の形式では無いと信じてのことです。”と、州学長会議の会長は語った。申し込みテーマの重複を防ぐため、南西の諸大学は 7 月にお互いの申し込みについて情報交換をする予定。似通ったテーマの場合、協定を結ぶ可能性がある、と Schaich 氏。

Tuebingen, Heidelberg, Freiburg の大学は自らを“灯台”の有力候補者として見ている。しかし Konstanz 大学と Mannheim 大学もそれを巡って戦う覚悟だ。“私達が 3 つの柱すべてに申し込むことは確定している。”と Mannheim 大学の代表者は語った。Tuebingen 大学はエクセレンス・クラスターとグラデュエート・コレグのために 10 件もの申し込みをするつもりだ。Freiburg 大学は 5 つの先端研究施設のためと、大学の全てのコレグに特別なサポートを提供する新しいグラデュエート・スクールを設置し応募する。

しかし、いくつかの大学は危惧の念を示した。今回のエクセレンス・イニシアチブ・プログラムによって大学建設のための資金が足らなくなるようなことになっては、全てのことが無意味になる、と Konstanz 大学の研究副学長 Bernhard Schink 氏は語った。

◎ミュンヘン諸大学 トップの座を協定によって強化

dpa, Nr. 32/2005, 8. August, 2005

○上記同様、Bayern 州における州単位での大学間協力の動向である。

Muenchen の二つの大学は互いのトップの座の拡大を自然科学、数学、経済学の 3 分野での協定によって期待している。8 月 1 日の州科学省からの発表によると、工科大学 (TU) と Ludwig-Maximilians 大学 (LMU) は教授ポストの補充を含めた教育と研究を互いに調節するつもりだそうだ。いちだんと強まっている国際的競争を乗り切るために二つの大学はこの協定を通してそれぞれの強味を束ねることにした。

Mittelstrass 委員会の評価によれば LMU, TU と Muenchen の数多くの研究施設はおそらく Berlin と並べることが出来る程のドイツの優れた学術センターであるようだ。州科学大臣 Thomas Goppel 氏 (CDU) は LMU 学長 Bernd Huber 氏と TU 学長 Wolfgang Herrmann 氏との契約の署名の際、この協定を画期的なものとして褒め称えた。将来的には共同のマネージメント・スクールと大学卒業者のための大学院課程が予定されている。

2003 年の秋に突発した二つの大学の合併を巡る論争はこれによってとりあえず落ち着いた。TU 学長 Herrmann 氏はこの協定契約を超えた協力を望んでいることをハッキリと示した。“いくつかの有意義であろうコトは実行不可能。つまり、遅かれ早かれ私たちが共通の施設を持つことになるでしょう。” 20 年後にはもしかしたら Bayern 大学が存在するかもしれない。

Goppel 氏も処女地に踏み込む。今までの習慣から離れ、二つの大学は上記の 3 分野で今後省からの干渉無しに新しい教授を公募することが出来るのだ。諸大学は共同の構成コンセプトを提出するだけでいい。それぞれの“ご近所大学に意義が無ければ” — このモデルを他の大学にも拡大したい、と Goppel 氏は語った。諸大学はもう長年、教授採用の際の政府からの干渉の減少を要求している。Mittelstrass 委員会も政府の管理緩和を薦めていた。2004 年に Goppel 氏によって任命された欧州科学アカデミー理事長 Juergen Mittelstrass 氏を会長とした専門家委員会は 4 月に Bayern 州の大学の再構成への薦めを提出していた。

4 大学 再生資源の研究を束ねる

7 月 29 日に Bayern 州の 4 大学が再生資源の学術センターを設立した。この新しい研究施設は Straubing の専門センターの中にある。この協力には TU (工科大学) Muenchen 大学、Regensburg 大学、Deggendorf 専門大学と Weihenstephan 専門大学が参加している。2008 年から南 Bayern で再生資源のマスター課程が提供される。Straubing の専門センターには再生資源の調整機関 CARMEN や技術・振興センターも入っている。この専門センターは資源植物、バイオマスや植物油からのエネルギーについて研究し、情報を提供する。

現在、Bayern 州は科学者のために 1600 万ユーロの新施設を築いている。4 大学はそこで再生資源の研究を束ねる予定だ。諸施設は合計 9 人の教授、9 のポスト、そして 9 の研究領域・学部を設置することになる。

◎ドイツの大学・研究機関の国際化を促すための 10 項目の覚書

http://www.humboldt-foundation.de/de/aktuelles/presse/doc/2005_zehnpunktememo.pdf

(フンボルト財団ホームページ)

○フンボルト財団 (AvH) とドイツ学術交流会 (DAAD) が、大学と研究機関の国際化を促すための 10 項目から成る覚書を共同作成し、7 月 6 日発表した。ドイツの教育制度と学術システムの競争力が、研究と教育の目標をいかに国際的なレベルで定めるかに係っているという観点から、この覚書は特に政治的決定機関に対し、ドイツの若手研究者を国際的なレベルで養成するとともに、優秀な研究者をドイツにとどめ、さらに外国から優れた頭脳を獲得するために、ドイツが外国人学生、博士号取得希望者及び研究者にとって最良の研究環境を備えていることをアピールするよう求めている。ドイツ外務省からの予算が近年縮小している上記 2 機関の危機感を反映したのもと思われる。

1. イノベーションと改革のために国際性を利用する！

研究、教育と学業の国際性は既に二次的な事からではなく、名声をあげるための大学発展と将来に向けた大学、科学政策の核心的な要素である。そのため、ドイツの学業・科学におけるイノベーションと競争力に関しては、国際的な交流や国境を越えた協力を振興することが最優先項目の一つに加えられるべきである。

2. 教育と研究の国際化を投資として理解する！

ドイツの研究の国際的な競争力強化や世界的な協力・信頼ネットワークの維持と拡大はわが国の将来への投資である。それらは将来的な社会制度も含めた繁栄を保証し、我々の国際経済力を補強し、国際的なパートナーや友人を獲得し、我が国を再び文化的・科学的国家として世界に認めさせる。それらの投資は“旧式の機構を維持し、競争を阻害するための補助金ではない”。(害をもたらす) 補助金を削減する必要はあるが、上記で挙げた活動のための補助金は削減されるべき対象ではない。

3. ドイツに先端研究を獲得する！

国際的に使用可能な知識はよりいっそうドイツでの研究に使われるべき。学術的な逸材をドイツでの研究滞在のために獲得し、共同研究を可能にし、ドイツ人研究者に国際的に認められた協力パートナーへのコンタクトを可能にするためには、研究拠点としてのドイツのための国際的なマーケティングは、成功を収めている学生マーケティング並に充実されなければいけない。目標数値は：外国人博士号取得志願者やポストドクターを最低 25%、およびドイツの大学での国際的な職員率を最低 10%。そのためには若手研究者の育成条件の改善、研究インフラストラクチャーの振興、および競争によってドイツ

の大学の名声を得るなどのドイツという研究拠点の魅力アップが必要とされる。だから国際化の振興は連邦と諸州の“エクセレンス・イニシアティブ“に含まれるべき要素なのである。

4. ドイツの学生の国際競争力を養う！

ドイツの大学卒業者が将来的にも世界的な労働・研究市場で強く競争できるためには、ドイツの大学の国際化はさらに強化されなければならない。少なくとも 50%の学生は実質的で学業に関連した外国滞在（大学留学、インターシップ、語学留学）を経験すべきである（現在は約 35%）。そのためにはカリキュラム的条件を作成し、また経済的支援が用意されなければならない。学業期間の短縮や学費有償化の導入によって国際的流動性が更に妨げられることになってはならない。

5. ドイツを再び世界中の学生の第一留学希望国にする！

ドイツの大学での外国人留学生率を最低 10%（現在 9%）までアップする。ここ数年の量的（のみの）増大のため、今後は外国人留学生の選抜と留学生のより良いケアを前提とした、学習成果とクオリティーへの強調が必要となる。マーケティングの重点はマスターとドクター取得志願学生に移すべきである。外国人学生に対する学費は公平で市場に見合っていれば可能であり、要求もでき、そしてサービス（授業、設備、人材、等）のクオリティー改善のためにはやむを得ないものでもあるだろう。しかしながら優秀な外国人のためには在学中・在学後に十分な奨学金や労働の可能性が提供されなければならない。そういった意味で移住法には寛大な行使方針による附則が求められる。

6. 我々の輸出チャンス教育と科学にも適応！

ドイツの大学の支局や出先機関、および在外国のドイツ大学（例：“German University in Cairo”）はドイツの将来の科学的、経済的、そして政治的な協力パートナーを育成するための重要な道具である。それらによって同時にドイツ人若手研究者のためのハイクオリティーな職場が維持され、そして作り出されることができる。そのため滞在国による（主な）資金提供と並んでドイツ側からも補助資金－開発援助金や国際経済振興金からも－が、特に新興工業国や発展途上国での高まる需要を満たすためにも、提供されるべきである。

7. 貧国の持続的な発展のための教育援助をアップ！

決議された開発援助の強化（目標 0.7%）で、自助独立への持続的な援助となる教育・養成の重要度がすべての段階で増さなければならない。教育援助枠では、（大きく削減された）大学設立や若手研究者振興のためのドイツからの援助を再び優先順位の上位に上げなければいけない。なぜなら大学では性急に必要とされる専門家のみならず、将来的にそれぞれの国の運命を背負うエリート達も育成されるからである。そのため現存する仲介機構と大学の振興手段－留学生への帰国援助や OB との地域的ネットワークのための手段も含めて－は大きく拡大されるべきである。

8. 文化のダイアログを長期的な平和・安全政策として振興！

9 月 11 日の同時多発テロによって我々の世界の危険性や脆さだけではなく、従来の安全政策の手段では乗り越えられないイデオロギー的・観念的な面での深い誤解、無理解、そして仲違いが露わにされた。これらの問題に対して共同の学習や平和的ダイアログの長期的なキャンペーンが必要である。このインターネット時代において、それは全ての境界線を越えた個人的な出会いや体験を意味する。これらの役割をフンボルト財団（AvH）、ドイツ学術交流会（DAAD）、ゲーテ・インスティトゥートや国際交流機関などが既に長年にわたって根気よくこなし、成功を収めているものの、活動の規模は小さすぎる。こういった活動の実質上の拡張は長期的なものにならざるをえないものの、その分持続的で有効な平和と安全への貢献なのである。

9. 大学と科学は引き続き連邦政府内閣内での発言権必要！

我が国にとっての教育と科学の実存的な価値と主に連邦の管轄である他の政治分野（外交政策、国際経済政策、開発政策、欧州政策）との多様な関連が連邦内閣での大学と科学の発言権の持続を必要不可欠なものにしている。特に欧州・国際面でドイツは一体となって行動できなければならない。長年の経験に基づく能力とネットワークを持つ AvH や DAAD などのドイツの諸科学機構もこの分野での重要な立役者である。

10. 世界の信頼されるパートナーとしての仲介機構とドイツのサービス提供者の強化！

外交的文化・教育政策の学術的、または科学的傾向を持った仲介機構 AvH と DAAD はドイツの科学、外交政策、そして経済政策や文化的交流に貴重な協力可能性を作る世界的な OB-ネットワークを築き上げた。AvH と DAAD はメンバーの独創力を活性化させ、政府の政策と科学制度との間の対話を調停し、（振興-）決定・承認の高い専門能力を確保し、更にサービス提供者として柔軟で効率的だ。予算削減化のため、仲介機構の振興手段、つまりは国際的な協力可能性が、ここ 3 年間縮小されていた。外交的文化政策だけをみても、本来の予算価値の 4 分の 1 が東西ドイツ統一以来削減されている。早急な方向転換が必要である。教育と科学同様、それらの国際化への振興も明確で、持続的で、確実な向上を必要とする。

◎DFG（ドイツ研究協会）政府顧問に科学者 賛成

dpa, Nr. 28/2005, 11. Juli, 2005

○7月7日、DFGの年次総会が行われた。DFGは新たに開始されたエクセレンス・イニシアティブの申請窓口となり、多忙を極めると同時に、その存在感と発言力を強めているようだ。

DFGは優秀な学者が将来政府の常時的な顧問になることに対して賛成の意を示した。“科学的サポートを必要とする問題が益々増えていくだろう”と、DFG会長 Ernst-Ludwig Winnacker氏は7月7日に開かれた協会の年次総会で語った。更にWinnacker氏はヨーロッパとドイツでの研究の振興の強化と“研究の自由”の拡大を求めた：“反研究的と私達が見なす法律がある”と同氏。

政府の顧問はWinnacker氏の意見によれば“定評があり、独立した科学者”でなければならない。科学的観点は多くの政治分野で益々重要な意味を持ちつつある、とDFG会長。例として気候問題政策、エイズ政策を述べた。しかし彼自身はその役割をこなすことは出来ない、とも主張した。

更にWinnacker氏は将来の連邦政府に幹細胞移入法への対応を要求した。彼は特に起算日規定や処罰威嚇などのドイツの幹細胞研究者に対する現在の条件を批判し、また一方最近連邦と諸州によってスタートされたエリート大学と先端研究の振興のためのプログラムを賞賛した。“これから実行に移していく”と、同氏。最初の選抜結果は2006年の10月に発表される予定。

DFGの予算は去年13億ユーロ。その内の58%を連邦政府が、42%ほどを諸州政府が負担した。DFGによればその予算によって科学者のための9163のフルタイム・ポスト、8823の半日ポスト、3731の博士課程、および1037の博士研究員（Postdoc）のための奨学金などが拠出された。

◎ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ協会新会長就任

http://www.helmholtz.de/en/News/Press_releases_2005/Helmholtz_3.06.2005_Juergen_Mlynek.html

(ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ協会 ホームページ・プレスリリース)

○9月1日、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ協会の新会長に、ベルリン・フンボルト大学総長、ユルゲン・ムリュネーク (Jurgen Mlynek) 教授が就任した。ヘルムホルツ協会は15の大規模研究機関と約2万4000人のスタッフを擁し、国家予算で運営されるドイツ最大の研究組織。15機関の中にはユーリッヒ研究センター (FZJ)、ドイツガン研究センター(DKFZ)、ドイツ航空宇宙センター(DLR)、ドイツ・エレクトロン・シンクロトロンセンター(DESY)などがあり、大学との密接な連携の下で共同利用されている。ユルゲン・ムリュネーク教授は実験物理学(実験量子物理、原子物理、界面物理)専攻。1996年から2001年にはDFGのVice-Presidentを務め、2000年9月からベルリン・フンボルト大学総長を務めていた。

同氏は就任挨拶で前任ヴァルター・クレル (Walter Kroll) 教授が進めた改革路線を継承する意向を明らかにし、大学との協力、産業界・社会との協力をさらに推進する必要があると述べている。

3. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問、会議出席等

【7月】

- 7月1日(金) 田中センター長がフンボルト財団の年次総会に出席(於ベルリン)
- 7月4日(月) 樋口、Schulze 職員が、CNRS Bonn 事務長 (Dr. Bernard Heusch) 送別レセプション出席(於ボン)
- 7月6日(水) 田中センター長がDFG年次総会出席(於ベルリン)
- 7月15日(金) 樋口、清水研修員、足立研修員がギーセン大学国際部訪問(大学の国際化状況等調査・インタビュー)
樋口、清水研修員、足立研修員が日独韓 PhD 学生ワークショップ(※)
(Solid State Ionics: Cross-Frontier Problems in Physical Chemistry and Material Science) に出席(於ギーセン大) (~16日)
(挨拶及び学振プログラム紹介)
(※東北大学多元物質研 21 世紀 COE プロジェクトによる支援)
- 7月18日(月) 田中センター長がDFG-JSPS 二国間共同セミナー(ブラックホールと銀河の形成と共進化)に出席(於レーゲンスブルグ) (~22日) (挨拶及び学振プログラム紹介)
- 7月19日(火) 樋口、Ganter 職員がDFG主催数学会若手研究者日本派遣プログラム事前カンファレンスに出席(於ベルリン) (~20日) (学振プログラム紹介)

【8月】

- 8月1日(月) 大阪大学先端科学イノベーションセンターベンチャーアービネ斯拉ボラトリー客員教授・足立泰二氏来会。
- 8月5日(金) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部ミーティング。
ドイツ日本学術振興会研究者同窓会・ボン研究連絡センター合同ミーティング。

マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・教授・Dr. Ingrid Fritsch、コンスタンツ大学・教授・Dr. Andreas Marx 氏

田中センター長、樋口、Ganter 職員、Schulze 職員、足立研修員が、フンボルト財団フェオドア・リューネンプログラム、JSPS、NSC フェロースhipプログラム同窓生、新規採用者への海外派遣オリエンテーション及びレセプションに出席

- 8月21日(日) 日本学術振興会国際事業部研究協力第二課・丹生課長、星係長来独
田中センター長がアムステルダム大学主催・天文学シンポジウム出席
(~26日)
- 8月22日(月) 丹生課長、星係長、樋口、Ganter 職員がドイツ研究協会(DFG)訪問：日
独共同大学院プログラムに関するミーティング (DFG 側出席者：Mr.
Schneider、Ms. Bondre-Bei、Mr. Dr. Gad)
- 8月23日(火) 丹生課長、星係長、樋口、Ganter 職員がフンボルト財団 (AvH) 訪問
：JGFoS2006 に関するミーティング (AvH 側出席者：Ms. Hartman、
Ms. Teubner)
- 8月31日(水) JSPS ボン研究連絡センター年次報告会 (JSPS Abend) 開催 (於ボン)

【9月】

- 9月 3日(土) 田中センター長が一時帰国・国立天文台台長選考委員会出席及び学振本
部訪問・業務打合せ (~8日)
- 9月 9日(土) 樋口、一時帰国、Ganter 職員が来日 (~16日)
- 9月12日(月) 日本におけるドイツ年/日独学術シンポジウム「Urban Planning -
Sustainable Cities」開催
(ドイツ学振同窓会・学振共催、於国立オリンピック記念総合青少年セ
ンター) (~13日)
- 9月15日(木) 田中センター長、Schulze 職員、足立研修員が CNRS ボン事務所開設 25
周年記念パーティ出席
- 9月26日(月) 田中センター長が European Space Agency (ESA) 主催シンポジウム「The
X-ray Universe 2005」出席 (~30日)

◎日独学術シンポジウム「都市計画ー持続可能な都市 (ー Urban Planning - Sustainable Cities)」開催

シンポジウムの詳細は次のウェブを参照のこと。
<http://www.jsps-bonn.de/pages/DinJ2005.htm>

本シンポジウムは、本年の「日本におけるドイツ年」の一環として、かつ「ドイツ日本学術振興会研究者同窓会」設立10周年の記念行事として、日本学術振興会と「ドイツ日本学術振興会研究者同窓会」との共催により、9月12日、東京の国立オリンピック記念青少年総合センター国際交流棟国際会議室にて開催された。

シンポジウムではドイツの先進的研究分野として国際的にも知られ、日独双方で関心の高い、グローバルな問題となっている「環境」分野を取り上げた。

講演に先立ち、本会を代表して伊賀健一理事、同窓会を代表してマールブルク大学 Prof.

Dr. Heinrich Menkhaus 会長がドイツ同窓会の 10 年の歴史を紹介し、挨拶した。引き続き、在日本ドイツ大使館公使 (Mr. Stefan Gallon, Minister of the German Embassy and Head of the Economic Department) が、ドイツ同窓会設立 10 周年の祝辞とともに、17 世紀の学者によって始まった学術を中心とした日独パートナーシップの個性的な歴史を振り返り、その良き伝統を引き継ぐドイツ同窓会への健闘を祈り、日独協力の重要な核となる環境分野の本シンポジウムを通しての日独学術交流強化への期待を述べた。

初めに、オーガナイザーでありドイツ同窓会役員の Dr. Arnulf Jager-Waldau

(Renewable Energies Unit, Institute for Environment and Sustainability, EC Joint Research Centre) が基調講演を行った。

続いて、「都市計画- 持続可能な都市」(Urban Planning – Sustainable Cities) を主題に、3つのトピック (1. 「持続可能な都市という概念」(Concepts of Sustainable City), 2. 技術的解決法 (Technical Solutions), 3. 都市計画の社会的影響 (Social Impact of Urban Planning)) に関して、学振のプログラムによって共同研究を経験したドイツ「学振同窓会」メンバーを含むドイツ人研究者(3名)及び日本人研究者(3名)がトピックごとに講演を行った。

トピック 1 (Concepts of a Sustainable City) では、Prof. Dr. Eckhart Hahn, University of Dortmund が「The Sustainable City Towards a New Post-modern Symbiosis between Nature, Human Society and Urbanism Theory, Concept, Model Projects」を、京都大学・谷口栄一教授が「Logistics Concepts for a Sustainable City」のテーマで、持続的都市というコンセプトについてそれぞれ講演した。

次にトピック 2 (Technical Solutions) では、足利工業大学・牛山泉教授が「Small Wind Turbines in Sustainable Urban Environment」を、Dr.-Ing. Ingo Hagemann, Architekturbüro Hagemann が「Solar Design in Architecture and Urban Planning Status quo and Perspectives」のテーマで、ソーラー・風力などの再生エネルギーの都市的取り組みについてそれぞれ講演した。

続いて、トピック 3 (Social Impact of Urban Planning) では、Dr. Stefan Hochstadt, FH Dortmund が「Social Impact of Urban Planning Challenges of the 21st Century: Shrinking Cities, Aging Societies」が、放送大学/国連大学特別学術顧問・鈴木基之教授が「Paradigm Shift for Sustainable Society」のテーマで、都市の社会的影響と将来展望についてそれぞれ講演した。

持続可能な社会に向け、資源・エネルギー消費量削減のため、都市はどうあるべきかを根本から問う本シンポジウムで、それぞれのトピックごとの講演では、日独双方の歴史を踏まえた持続可能な都市モデル – スピリチュアルな道を思い起こさせる芸術を取り込んだ江戸の都市や新たなポストモダンなドイツやヨーロッパの自然共存型都市、ソーラー、風力など再生エネルギーを取り込んだ都市運営の取り組みなどが紹介され、人口減少の高齢化社会の「縮む都市」と人口増化都市との比較などの研究成果が発表された。またさらに広い視野から「持続可能な社会の実現に向けたパラダイム転換」などの将来展望と提言が発表された。

会場にはドイツから来日した 30 名ほどのドイツ同窓会の会員をはじめ、そのメンバーがかつてお世話になった日本人受入れ研究者、現在日本滞在中のドイツ人フェローとその受入れ研究者、ドイツ関係機関関係者に加え、環境、都市分野の専門家など計約 80 名が参加し、トピックごとの分りやすく面白い内容の講演を熱心に聞き入り、鋭い質疑応答が交わされた。

講演内容そのもののレベルの高さ、興味深さとともに、環境問題に対する日独双方の取り組みの具体的例を歴史的に眺望し、将来展望を日独共同で模索することの意義を高く評価し、

賞賛する声が相次ぎ、聴衆の反応は非常に良好であった。シンポジウムは成功裡のうちに幕を閉じた。

シンポジウム終了後には立食ビュッフェ形式のレセプションが同レセプションホールで催され、ボン研究連絡センター第 2 代センター長の新井栄一教授、ドイツ同窓会日本代表の Prof. Akira Hori がドイツ同窓会と日独学术交流のさらなる発展を祈念して共同で乾杯の音頭を取った。ドイツ同窓会役員の日本研究テーマでもある「ちんどん屋」が駆けつけ、同窓会 10 周年を華やかに祝宴し、チンドン太鼓を中心とする日本の懐かしい音楽をバックミュージックになごやかな懇談が続いた。

またシンポジウム翌日には、カルチュラル・プログラムとして浅草、大江戸博物館に続き、ドイツ人学者ゆかりの地を訪ね、東京大学農学部の Oskar Kellner 碑、同医学部の Erwin Baelz、及び Julius Scriba 碑、東工大の生みの親 Gottfried Wagener 碑及び同氏の記念コーナーのある百年記念館を見学した。

◎JSPS Abend 《学振の夕べ》

2005 年 8 月 31 日 (水)、ボン市郊外の Bad-Godesberg に位置する〈La Redoute〉において、当該センターが JSPS Abend 《学振の夕べ：年次報告会》を主催した。〈La Redoute〉は、かつての選帝侯の歴史的舞踏館である。この催しは、通称 JSPS ズマーフェスト (夏祭り) とも呼ばれ、ドイツ関係機関の関係者に広く知られている。日ごろ良好な協力関係を保ち、お世話になっている関係機関 (省庁、高等教育機関、研究機関、研究支援機関、文化団体等) 関係者のうち、ボン近郊に在住・在勤の方々を招待して、当該センターの過去 1 年間の活動を報告するとともに、今後の日独協力の展望を提供し、出席者相互の親睦を深めることを目的としている。

開催にあたって、まず、田中靖郎センター長から、ボン研究連絡センターの活動への協力に対する関係者への謝辞が述べられるとともに、この 1 年間の活動報告および学振の新たな動向を踏まえた今後の活動計画が報告された。また、ドイツ同窓会を代表してマールブルク大学 Prof. Dr. Heinrich Menkhaus 会長が、本年が同窓会 10 周年であり、ドイツ同窓会の 10 年の歴史を概観するとともに、10 年を支えてくれた関係者への謝辞を述べ、日独交流のさらなる発展を祈念して乾杯の音頭を取った。

今年も 100 名を越える参加者が集い、学振の新たな動向を理解してもらい、懇親を深める貴重な機会となった。

◎DFG 主催・数学会若手研究者日本派遣プログラム派遣前オリエンテーション出席

2005 年 7 月 19 日 (火) - 20 日 (水)、ドイツ研究協会 (DFG) が主催し、ベルリンの学術関係機関共同事務所で開催した、「DFG-DMV (数学会) イニシアチブ：日独若手研究者交流派遣前オリエンテーション・セミナー (DFG-DMV-Initiative zum deutsch-japanischen Nachwuchswissenschaftlertausch Vorbeitungsseminar)」に出席し、本会及び本会プログラムを紹介した。

DFG の学会支援によるドイツ人若手研究者の日本派遣の試みは今年から開始されることになったものである。今年 3 月に実施されたドイツ化学会若手研究者の日本派遣プログラムに続く、第 2 番目の学会支援による若手研究者日本派遣である。

このプログラムはいわば学振サマープログラムの学会協力版であり、プレドク・ポスドクを対象に2か月間の日本滞在で日本を経験してもらおうという企画である。

ドイツ人若手研究者が自ら日本を研究先として選択することが少なく、日本に行こうとする若い研究者が非常に少ないことを危惧し、学会との協力により、まず日本を体験・経験する機会をもってもらおうというのがDFGのこのプログラムの生まれた背景である。

数学の若手研究者はその数学的能力のため、昨今ではバイオ、物理系関連企業へ就職しがちであり、またドイツ数学会は日本数学会と全くつながりがなく、これを機に日独の学術研究協力を発展させたいという。

今回は数学会との協力により選考された8名が各自のスケジュールに応じて訪問計画を立て、8月末ないし秋から日本を訪問する。8名はベルリン自由大学、ブレーメン大学、マールブルグ大学、ダルムシュタット工科大学、ハレ大学、マグデブルグ大学、フライブルグ大学、フライブルグ工科大学に所属し、それぞれ北大、名古屋大、京大、東大、東京女子大、広島大を訪問する予定である。

当日のオリエンテーションでの講師は先に化学会の日本派遣プログラムで帰国した若手化学者2名の他に日本滞在経験のあるドイツ人数学者、ボン大学日本学講師などで日本での経験談の講演を中心に、日本での体験を報告し、活発な質疑応答が行われた。

わずか2か月の日本滞在であっても、ドイツ人参加者は研究上の不安よりも、研究室での人間関係や生活上の不安を感じ、細やかな心遣いをする。例えば、ドイツからのおみやげは何かよいかなどという真剣な問いがある。化学会派遣プログラムの経験者との異分野交流もあまり異分野との接触のない若い数学者には新鮮だったようだ。中には自らの研究テーマ以外に古代建築、古代文化などに強い関心を寄せる者もあり、いずれも日本訪問が初めてという参加者たちの日本と日本文化に対する期待はとても大きい。今回の短期2か月の経験で日本が良かったら次は長期間日本で研究したいという声も多く、参加者の強い期待を感じさせるオリエンテーション・セミナーであった。このような機会に学振のプログラムを紹介できたのは非常に良かったと思う。このような機会に参加するたび、国際交流発展の土台は個人と個人とのつながりなのだ実感する。なお、DFGでは帰国後に化学会派遣同様に帰国報告会を行い、今後の日独協力の発展につなげていく予定である。

◎その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ”forschen-in-japan.de”の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター(ルンド・シュライベン)等の作成・配布
- ・ 各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報(資料出展、新聞広告掲載ほか)
- ・ ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ 日独学術シンポジウム(9月東京開催)開催準備
- ・ 日独シンポジウム(4月開催)プロシーディング作成準備
- ・ ドイツ同窓会10周年記念誌の作成

4. 今後の予定

2005年

10月 5日(水) ・ 文科省生涯学習政策局調査企画課 外国調査係 EU・ドイツ担当(専門職)
高谷亜由子氏及び在独日本大使館・氷見谷直紀一等書記官来会

- 10月11日(火) ・韓国大使主催・韓国民の日記念の夕べ
産業研究財団(Stiftung Industrieforschung)主催・ダルムシュタット工科大学長等の講演会出席(於ボン)
- 10月12日(水) 総合地球環境学研究所・梅津千恵子助教授ほか来会
- 10月18日(火) ・DJW(日独産業協力推進委員会) Managing Director・Dr. Kerstin Teicher 来会
- 10月22日(土) ・フンボルト財団・JSPSフェローシッププログラム選考会出席
ルクセンブルグ Science Festival 出席(学振及びプログラム紹介)(於ルクセンブルグ)
- 10月25日(火) NRW州革新、学術、研究・技術省(Ministerium für Innovation, Wissenschaft, Forschung und Technologie) 次官 Dr. Michael Stuckradt を訪問(予定)
- 10月26日(水) ドイツ博物館ボン(Deutsches Museum Bonn) 10周年祝賀会出席
- 11月3日(木) ドイツ大学長会議(HRK) 主催「高等教育の質保証—10年の評価からの経験と教訓」シンポジウム出席(於ボン) (—4日)
- 11月8日(火) Internationaler Club La Redute 主催「教育と科学におけるエクセレンスとイノベーションの挑戦：基金の役割」講演会(於ボン)
- 11月17日(木) Helmholtz 協会(HGF) 年次総会(於ベルリン) (参加未定)
- 11月25日(金) ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部ミーティング。
ドイツ日本学術振興会研究者同窓会・ボン研究連絡センター合同ミーティング。